

* ローカル鉄道「三江線」で辿る石見の国 ②

江の川の流れを愛でつつ粕淵から江津へ下る
河口に栄えた江津の歴史を伝える古い町並み
浜田の[壘が浦]で奇岩の景観を愉しむ



ローカル鉄道「三江線」で辿る石見の国 ②

* 江の川の流れを愛でつつ粕淵から江津へ下る

昨夜は、野鳥の囀りさえ聞こえてこないような静まり返った山あい、ひっそりと佇んでいる湯抱温泉で石見の湯にゆったりと浸かり、山の湯宿らしい風情を満喫した。きょうは、日本海に面する江津へ出て、江の川の河口に栄えた歴史的な町並みをぶらついてから浜田の壘が浦を訪ねることになっている。

J R 三江線の気動車でのんびり石見の国を辿る旅の2日目は、粕淵から江津方面へ向かう7時51分発の一番列車で始まった。無人の改札口を通り抜けて粕淵駅のホームに上がったが、どこにも人影はない。



しばらくすると、江津方面から1両の気動車がやってきた。江津方面へ引き返す列車だと思って乗り込もうとしたら、これは三次行きだと運転手に押し戻され、気動車は東へ去って行った。

まもなくトンネルから這い出すように江津行きの列車が現れる。どうやら隣の浜原駅で行き違う仕組みになっていたらしい。単線の三江線は、列車が行き違える駅が限られているようだ。駅員がいないので訊ねようもない。不安だったが、待つ以外になかった。

人手が少ないローカル線の駅では列車の到着をアナウンスして乗客を誘導し、発車のベルを鳴らしながら、安全を確認して見送ってくれる駅員のサービスが当たり前な都会地のサービスとは比べようもないことを思い知らされる。



粕淵から乗車したのは私たち5人のシニアだけだったので、空いている車内を自由に歩き回りながら車窓の景観を存分に愉しめる。

石見都賀から粕淵にかけて江の川の右岸を走っていた三江線は、粕淵を出るとすぐに鉄橋を渡り、それからは終着駅の江津まで左岸を辿っていく。

左手の車窓は山の斜面で塞がれている。それではと、前方や後方の様子を運転席の脇や最後部から撮影する以外は、右側の座席にどっしりと腰かけて、滔々と流れ下る江の川が緩やかな湾曲を繰り返しながら姿を変貌させていく様子を眺めて過ごす。

対岸を眺めると、山の斜面から岸辺までびっしりと隙なく竹が密生している。竹の繁殖が山林を傷めている話は珍しくなくなったが、竹の林に護岸の効果が期待できるのだろうか。粕淵から4つ目に竹に因んだ「竹駅」があった。駅の名前にまでなっていることから、この地にはなにやら竹に因んだ伝承が潜んでいそうな感じがするが、辺りを見回しても集落らしきものはなく、乗降する客もないままに気動車は淡々と先へ進んでいく。

山と川という自然ばかりで変化の少なかった車窓に、街らしい景観が顔を覗かせたのは石見川本だけだった。



ここは江の川と国道261がクロスしている交通の要衝で、長年にわたって流域の経済を担ってきた街らしく、車窓にも人々が行き来している様子など街の賑わいを感じられる。石見川本駅には駅員の姿もあった。

子供と年寄りを交えた複数のファミリーが乗ってきたので、なんとなく車内に温かみが広がる。

江津が近づくにつれて少しずつ乗客が増え、地域の交通手段として馴染まれていくローカル鉄道らしくなってきた。

車窓に映る対岸の景色にもだいたい集落が連なるようになって地域の暮らしが感じられる。

ただ、三江線が走る左岸はなんの変わりもない自然の風景なのに、右岸ばかりに変化が見られるのはどういうことなのだろうか。右

岸と左岸の違いと言えば、右岸には江津へ向かう国道261が走っている。

道路が整備されて、車による移動が便利になったことが右岸の優位ならば、田舎の暮らしに自動車が欠かせなくなった車社会がもたらした結果ということになる。

いつのまにか、川幅がずいぶん広くなって、湖水のように水量が増している。海辺が近くなり、この辺りまで海水が上がってきているのかも知れない。岸辺に舫っている船に気

づいて、江の川が担っていた舟運の歴史を思い出した。

* 河口に栄えた江津の歴史を伝える古い町並み

江津の町並み案内を頼んだボランティア・ガイドに、古い町並みの散策であればJR江津駅ではなくて、ひとつ手前の江津本町駅で下車するのが便利だとアドバイスされた。

しかし、お薦めに従って降り立った三江線の江津本町駅は、山の斜面と江の川に挟まれた土手の上にプラットホームがあるだけで、駅舎はおろか周辺の案内地図もない。どっちへ向かって歩いたら町へ行けるのか見当が付かないし、道を訊ねようにも、人家が見えない上に人通りもない。

ようやく、斜面の木陰にガイドをしてくれる山本さんの姿を見つけてほっと胸を撫で下ろす。歴史的な町並みが残されている江津本町は、三江線の駅と小さな山藪で背中合わせに隔てられているだけで、山あいを抜けて坂を下っていくと眼下に赤い石州瓦で葺かれた家並みが連なっていた。



江の川の舟運や、日本海を往来する北前船の寄港地として栄えた江津の港や町は、日本海に面していると思いついてきたが、実際は、海辺から丘をひとつ越えた山あいにあった。

南北の低い丘に挟まれる形で、東西に走る本通り（旧山陰道）に沿って町が形成されたのは、荒れる日本海に面した砂浜の海岸では、船を舫いで荷の積み下ろしをすることが難しいために、川を遡った汽水域に河口港を設けたものと思われる。

最初に案内されたのは本町の一郭を占めていた陣屋の跡だった。現在は住宅街になっているので気づきにくいですが、石垣や掘割は陣屋だった名残をそのまま伝えているという。ガイドの山本さんが「大村益次郎」の名前をさ

かんに口にしてはいるが、江津と大村益次郎の関係が分からないので戸惑わされる。

しばらくして、幕末、長州征伐のために乗り込んできた幕府の軍勢と対峙するため、長州軍がここに本陣を築いて駐留していた時の話だと分かってようやく納得がいった。

確かに、征長軍を迎え撃つ長州軍の参謀として石州口の指揮を執っていたのは、周防国



鑄銭司村で村医者をしていた村田蔵六だった。一介の村医者だった蔵六が、緒方洪庵の適

塾で学んだ蘭学を足掛かりに、翻訳で得た知識を活かして蒸気機関をはじめとする近代技術一般に通じただけでなく、日本に於ける戦争を、鎧兜で身を固めた侍が槍や刀で切り合いをする闘いから、軽装の兵卒が物陰から銃を撃つ戦いに様変わりさせるなど、兵の編成から戦闘の仕方までも考案するなど、幕末から明治にかけての混乱期の日本の兵事をリードし、大村益次郎として、靖国神社に銅像が建てられるようになった波乱の生涯は、司馬遼太郎の小説「花神」に詳しい。

村田蔵六に率いられた石州口の長州軍は、幕府が長州征伐のために編成した軍勢を打ち破っただけでなく、その勢いを駆って徳川の親藩だった浜田藩までも敗走させたので、陣屋を築くほど長期に亘って一か所に留まっていなかったのに、蔵六が指揮する一個大隊450名あまりが、慶応2年から明治2年まで、3年間もこの地に駐留していたと知って驚いた。



長期に亘る駐留だったので、すっかり地元に馴染み、そのままこの地に住みつくようになった兵士もいたらしい。

その後、町をぶらぶら巡っていて、洪水で被害を受けたときの水位のレベルが町のあちこちに記されているのに気付いた。



表示されている水位は、昭和47年7月に本町地区を流れている本町川と陣屋川の氾濫に加えて江の川からの逆流もあり、浸水が135センチに達したときのものらしい。

江の川は昭和58年の7月にも流域に大きな被害を与えるなど、穏やかにみえる流れが、ひとたび水を含むと大変なことになることを思い知らされる。

ただ、破壊の度合いが激しい戦災や火災と違って、洪水の場合は一過性なので水が引けば復興をしやすいためか、この町にはさまざまな旧家が昔の姿をとどめている。



いずれも国の登録有形文化財に指定されている藤田家住宅（五島屋）、藤田佳宏家住宅、旧江津町役場本庁舎、花田医院、旧江津郵便局をはじめ、本町川沿いの道端に設けられている牛馬をつなぐのに使われた鼻ぐり

石など、興味を惹かれる歴史遺産に事欠かない。

国の登録有形文化財には指定されていないものの、横田家、高原家、飯田家、豊田家などの住宅も、それぞれに個性的な特徴を残しながらきちんと保全されている。なによりも所有者が住み続けて、いまでも旧家が現役であることに感銘した。

江津の繁栄は北前船など廻船のビジネスに加えて、天領であった立地を活かした両替商の活躍によるものと思われる。だが、それらの富は限られた特定の商家に独占されることなく広く地域の経済を潤していたようで、山辺神社や観音寺といった歴史ある立派な神社や仏閣が損なわれることなくいまに伝えられている。

また、江津町の役場や郵便局の古い建物には、明治時代や大正時代の華やいた文化の息吹が感じられ、いかにも石見の江津らしいと強い印象を受けた。

* 浜田の[曇が浦]で奇岩の景観を愉しむ

江津から浜田への移動は山陰線の列車を利用するつもりだったが、時間の折り合いがつかなくて、江津本町から「石見曇が浦」へタクシーで直行する。

日本海の荒波に身を晒している曇が浦は、海風が強いと波しぶきに覆われる。天候によっては見学が難しいこともあると浜田出身の米原さんに前もって釘を刺されていたが、さいわい、この日は波が穏やかで、波打ち際まで足を運んで、さまざまな奇岩の景観をじっくり見て回ることができた。

曇が浦は、隆起した丘陵が波によって浸食された海食崖と呼ばれる切り立った崖と海に突き出ている広さが49000㎡にも及ぶ波蝕棚の平らな台地である。

海食の棚には規則正しく縦横に走る亀裂が見られ、曇を敷き詰めているように感じられることから「曇が浦」と名付けられたらしい。何度となく訪れてはいるが、いまだに



これらの奇岩がどのようにして生まれたのか理解ができない。しかし、不思議なことに見飽きすることがない。訪れる度になにか新たに惹かれるものに出会っている。

海食の台地へ辿ろうと、海に張り出した岬の下を潜り抜ける洞窟に入っていくと、岩の裂け目から海の景色が覗いていた。

なんどか見慣れた景色だが、真っ暗な洞窟から窺いみる外の世界は、たいへん幻想的に

映る。海面に突き出した岩に波が打ち寄せている光景などは、黒い磐に縁どられて神秘的に感じられ、いつも足を止めさせられる。

畳を敷いたような平坦な岩盤の原をぶらつく
と、腰掛のような面白い形をした岩（ノジュール）
の行列に出会う。



足元の潮だまりに目を凝らすと、潮に乗って岩
の裂け目に入り込んできた貝や小魚が目につく。

化石であれば、二枚貝はもとより、ヤリのように
尖った巻貝まで多様な貝の化石がそこいらじ
ゆうに満ち溢れている。貝の化石は45種以上もあると言われ、珍品としてはクジラの化
石も発見されているらしい。岩盤の亀裂が描きだしている節理もなかなか美しい。自然が
自然のままに織りなしている芸術作品の巧みに圧倒される。

さまざまな化石が露出している足元に目を凝らしながら海食台地を一巡してから、国民
宿舎「千畳苑」で海鮮どんぶりの昼食をして、浜田駅発14:45の高速バス JR 便で広島に戻
った。

ローカル鉄道の「三江線」で辿った1泊2日の旅は、地味な風土が取り得の石見を巡る
ものなので目を惹くような魅力の発見が少ないことを覚悟して、忘れられた田舎の昔を肌
で感じられればと思っていたが、あちこちで期待を上回る出会いに恵まれて、石見の国を
再認識することになった。

MK